
虹色チョコレート

ごまたまご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹色チヨコレート

【Nコード】

N9635N

【作者名】

ごまたまご

【あらすじ】

ある日銀さんは拾った怪しげなチヨコレートを食べてしまう。

翌日、なんと銀さんは…！？

そんな時、江戸にやってきたある賊が陰謀を企てていた。

その賊とは…！？

銀さんが若返ってしまうお話。中身は今と変わりません一応。

原作を基にした、オリジナルの人物と言うか団体が出てきます。

苦手な方はお逃げください^^

タイトル変更するかもしれませんが。

これあれですから。あの、適当ですから。
考えるのめんどくさかったからです。

現在更新停滞中。 ちょっとだけ増えたりするかもですが、
受験生なんで、あまり更新しにこれません><
来年度になったら恐らく再始動します。

第一訓 落ちているものを食べてはいけません！（前書き）

はじめまして。上須です。

こんなありきたりな文を読みたいと思ってくださった方ありがとうございます！

亀更新でぐだぐだでベタで駄文ですが、

これからしばらくよろしく願います。

初心者ですので、色々ミスがありますでしょうが、そんなときは、殴り殺す勢いでお知らせください^^

第一訓 落ちているものを食べてはいけません！

万事屋某曰。

朝からテンションの低い万事屋では、いつものように3人がぐだぐだとテレビを見ていた。

「おーい新ハイ。ざらめとってくれざらめ」

「ざらめなら昨日使い切っちゃったでしょう?」

「そうアル。毎日大さじスプーンでガリガリやってりゃ2kgなんてあつという間アル」

「まじでか…。いつにも増して銀さんイライラしてんのによぉ…」

銀時は頭をガリガリとかきむしり、唸っていたが、突然何か閃いて机の引き出しを開けた。

「どーしたアルカ?」

「いやーこないだ玄関先で拾ったチョコレートあつたなあって思ってた」

「そんなもん落ちてたんですか。まあ良かったですね」

しばらく引き出しをあさっていたが、お目当てのものを見つけたらしく、銀時は嬉しそうに顔をほころばせた。

「そーそーコレコレ！」

パッケージが虹のグラデーションで、異国の言葉の書いてある怪しげなチョコレート。

それでも糖分摂取にはなるだろうと3分の1程度に割って一口頬張る。

「何コレ…苦っ…砂糖入ってねーよこれ…につが…」

顔をゆがめ、後はお前らにやるよというように銀時は新八にチョコレートを投げる。

と、ひらりと紙切れが落ちた。新八が拾い上げてみれば、メッセージカードのようなもので。

『時には昔を振り返るのも大切だと思います。坂本』

坂本さんだった。銀時より死んでいるであろう目でその紙をにらみつければ、銀時がみせると催促する。

銀時は、カードを受け取り冷めた目で黙読すると

破った。

というか引き千切った。紙片が舞い散り、神楽が名残惜しそうに手を伸ばす。

「ああつ！私まだ読んでないネ！」

「ねえ新八くん！あの馬鹿の携帯番号知らない？てか所在地ご存じないですかコノヤロー」

「知りませんよ！あ、タウンページなら」

「載ってるはず無いアル。第一あれは町じゃなくて戦艦ネ。バトルシップアル」

「何かかつこいいけどどうんすんだよ！新ハイバトルシップページ持つて来い！」

「ねーよそんなん！」

「銀さんどうなっちゃうのさああああ！！！！！！」

「一体何が書いてあったアルカ？当たり前チヨコレートだったアルカ！？

工場見学にいけるアルカアア！？」

「お前ら黙れエエエエエエエエエ！！！！」

3人の悲鳴とも取れる、いや若干一名確実に悲鳴だが、叫びを、家賃の催促に来ていたお登勢が怒声を放って掻き消した為、この絶叫タイムは一時お開きとなった。

第一訓 落ちているものを食べてはいけません！（後書き）

短めになりました。

さて、次の更新はいつになるやら。

感想等ございましたらありがたくいただきます。

辛口でも美味しくいただきます。もぐもぐ。

第二訓 TKGは世界を救う。(前書き)

二話目です。どうぞー。

第二訓 TKGは世界を救う。

結局あの後、銀時には何事もなく、ただお登勢に店の掃除をさせられて1日が過ぎた。

そして翌日。

新八が万事屋に来たが、いつものように誰も目を覚ましていない。

だが、万事屋の前の通りはいつもよりも閑散としていた。

それもそのはず。今日はいつもより早く出勤したのだ。といっても7時だけど。

昨晚、新八が家に帰ると父方の古い友人からダンボール一箱荷物が届いており、中には米袋が2袋。

近頃万事屋のメンバーが炭水化物を禄にとっていないという話を知ってか知らずか、妙が万事屋に、と米を5kgほど新八に渡したのだ。

というわけで、今日は久しぶりに2人に白米を食べさせてやろうとというのが、早めにやってきた理由である。

台所で米を炊きながら、一緒に持ってきた卵で（家にあったところでただの兵器と化す）玉子焼きを作る。

皿に盛り付ければ出来上がり いざ、2人を起こしに行く雑用係。

となりの和室へ続くふすまを開けば、やはり熟睡中だった。何か違和感も感じたが、特に気にすることもなく、雇い主に声をかける。

「起きて下さい銀さん。朝ですよ」

ごそり、と身じろぎしたが未だ起きる気配は無い。

「銀さん。今日は白ご飯あるんですから冷める前に起き…」

「本当アルカ！久しぶりの白米アル！ヒャッホオオオウ！！」

途端背後の押入れの扉が開かれ、嬉しそうに叫ぶ神楽。

その声が漸く意識に辿り着いたのか、銀時が寝ぼけ半分で言った。

「朝っぱらからうるせーなコノヤロー。こんな早く朝飯作るのがどこにある」

ボーイソプラノが響く。

…ボーイソプラノ？

呆然としているうちにむくり、と銀時が体を起こし欠伸を1つした。
寝ぼけたままで、まだ自分の変化に気づいてないらしい。

対して、新八の後ろから和室を覗き込んでいる神楽は目を見開いて、
銀時をじっと見詰めている。

だぼだぼの銀時の寝巻き、ふくよかな頬、かわいらしい図体。 10
歳未満の子供がそこにいた。

さすがに2人にじとーと見られて、何だ、と目が覚めた銀時は声を
上げる。

「なあに？銀さんもしかしてサラサラヘアーに…」

はたと口を閉じて、従業員を交互に見てから最後に自分の手に目を
移す。一瞬の間。3人は叫んだ。

「だれ俺にヘリウムガス吸わせたの!？」

「腐ってる！この世界腐ってるよ！！てかさこじゃねー！！」

「か、隠し子アルウウウウ！！！！」

数分後。万事屋には子供3人が玉子焼きをおかずにとTKGを食べるというシュールな光景があった。

「ふうー食った食ったー」

「銀ちゃん私まだ足りないアル。おかわり」

「おかわり禁止ですー。お前はそんなにこの家をまっさらな砂漠にしてーのか。食料一つ見つからないゴミ砂漠にしてーのか!？」

「銀さんゴミじゃなくてゴビです」

「まあそんなことどうでもいいアル。さっさと話し進める駄目鏡が」

「お前から始まったんだろおがあ!!!」

叫ぶ新八を無視して神楽はでろーっとソファーに座っている銀時を指差した。

「おいコラ隠し子」

「隠し子じゃねーっての。銀さんに親はいませーん居るのはいこの友人の友人の友達の同僚の姉さとする君だけでーす」

「誰だよ！てか全く銀さん自身と関係なくね！？姉がさとするっておかしくね!？」

「おいコラさとする」

「誰がさとするだあああ!!!」

進展の無い会話を続けても無駄なただ、と新八は2人を落ち着かせる。

そして、神楽と新八は2つあるソファーの銀時とは逆の奴に座り銀

時と向き合った。

なぜか姿勢を正す銀時を見直してみるが、やはり天パの銀髪、現代よりは開いているけれど相変わらず死んだままのえんじ色の目。

「銀さんですね」

「銀ちゃんではないアルナ」

「えっ何なんで俺あきらめの目で見られてるのさ！」

慌てた声は少年特有の高い声だが、ここまで容姿が似ていれば本人が言い張るまでもなく銀時だろう。

その上マダオな性格なら決定としかいえない。

突然、神楽の目が光った。気がした。それを見た新八はハツとする。

（あれは…！）

神楽の体が宙を舞う。標的は…。見上げた銀時の頬が引きつる。

ドムッ！

「銀ちゃんも小さくなればそれなりにかわいいアルナ！弟にほしいアル」

（獲物を見つけた肉食動物の目だ！）

格好の遊び道具を見つけた神楽の顔に時折黒いものが走る。

じたばたと暴れる銀時の肩を持つ神楽。ぱつと見、姉と弟のほほえましい光景だが、

神楽は宇宙最強傭兵部族夜鬼。あの肩にどれ程の力が加わっているか知れない。

現に銀時はすさまじいスピードで青ざめている。

「か、神楽ちゃん…銀さんだばだばの寝巻きのままだから、とりあえず服探してあげよう?」

新八が決死の覚悟で声をかけると、意外にも簡単に手を離す神楽。

助かった、と安堵していた銀時だったが、神楽が自分の服を入れた箱をあさりだしたのを見て、

再び頬を引きつらせる。

「銀さんはおもちゃじゃないんだよー」

歌舞伎町女王の黒い笑みでこれを着せたらどんな風になるだろうか、と雇い主のいじめ方を考える神楽を見て、半泣きの銀時は呟いた。

第二訓 TKGは世界を救う。(後書き)

しばらくはストックあるので比較的更新率を上げる事ができるかもしれないかもしれないかもしれない。かもしれない。

感想等お待ちしております。

第三訓 前や上を向いて歩く前に自分の歩いてる所にアレが落ちてないか確認

本日2話目。

第三訓 前や上を向いて歩く前に自分の歩いてる所にアレが落ちてないか確認

給料も払わない雇い主が散々遊ばれるところを見ようかと新八は思ったが、さすがに心が痛んだので、走って自宅に帰り、昔自分の着ていた服を引っ張り出して持ってきた。

息を切らして部屋に入ると、神樂がいつぞやに激安バーゲンで買った服を着せようとして銀時とつくみあっている最中。

どうにか神樂を説得し、銀時に服を渡してやる。

「…新八…お前が神か」

何か神々しいものを見る顔つきでこちらを見る銀時。反応の仕様が無い。

銀時が着替えてみると、ちょうど良い丈だった。

「見た目は子供！頭脳は大人！その名も『万事屋銀ちゃん』！！」

「違うアル。頭脳はマダオネ」

「よし神樂。お前の給料差し引いとくわ」

「そついうのは払ってから言うものアルヨ」

「俺が悪かった。マダオです。ただのマダオです」

そんな請け合いを無視して新八はテレビのスイッチを入れて声を上げた。

「銀さん！ちよつと見てください！」

映っていたのはどこかの港で、結野アナが実況をしていた。

「おつ 結野アナ」

「問題はそこじゃないですよ」

『現在、こちらの港には宇宙からやってきた船が来ています。珍しく、ターミナルを通らない来訪…』

「だから何なんだよ」

結野アナが映らなくなり、港の宇宙船が映し出され、あからさまに興味を失った銀時。

ふと、画面の隅に毛玉が映った。茶色のもじやもじや。そしてマイクに入り込む、アッハッハッハという笑い声。

…ポキポキッ

新八が振り向くと、指を鳴らし木刀を手にした銀時が立っていた。

笑顔で。

「新ハイ俺ちよっくら殺^やつてくるわ」

子供の無邪気な笑みに混ざる暗黒の谷底で、つい立ち止まる従業員2人。

そうして固まっているうちに、銀時が玄関を開けて外に出て行ってしまった。

「…追いかけてよう神楽ちゃん！」

「そうアルナ」

2人が外に出ると同時に1階からガタンっとな音が響いてきた。

なんだ、と下を覗き込むと、階段の下から1段目で足を踏み外したのか、地面に転がる雇い主がいた。

しかし、捕獲する前に逃げられてしまい結局は搜索が必要となったのだった。

「何なんだよこの体動きにくいんだよ。さっきもあと一步で地面つてとこでこけたし」

歌舞伎町の大通りから一本外れた裏道に、顔を両手で覆いながら歩く子供が一人。

「まず新八と神樂に上から見られてる時点で最悪…。まああの毛玉は直す方法聞いてから即昇天させてやろう」

物騒なことを言い、黒々としたオーラを放つ銀時。

そんなときに限って、会いたくない奴らに会うものだ。

「近藤さん。殺気放出してる珍しいガキがいますぜ？」

「ん？本当だ。おい坊や。迷子にでもなったのか？」

声を聴いた瞬間肩をはねさす銀時。声紋、一致しました。

ゆっくり顔を上げれば真選組御一行がこっちを見ていた。顔も一致しました。

その顔を見た土方が、怪訝そうに言葉を放つ。

「お前：万事屋の野郎にソックリじゃねーか」

それを聞いた沖田も銀時を見つめる。対する銀時は冷や汗まみれである。

（ちよつこればれたら泣く！そりゃパー子ばれるよりはマシだけどさ！でも！！）

「あー確かに旦那にクリソツでさあ。目が死んだり目が死んでたり土方が死んだり目が死んでたり」

「なんか変なの入った！？てか俺の特徴は目が死んでるだけかよ！」

「黙って死ね沖田。仕方ねえだろ。てめえの目が死んでんだから」

「うつせえええ！！いいんだよ！いざというとき輝くから！」

口にしてから後悔した。ああこれ前にも言っただけがする…。ちらと土方を見ると、瞳孔の開いた目を見張っていた。

「こいつぁ……」

「どうしたトシィ？」

「前、野朗もいざというときキラめくとか言ってたような覚えが…」

子供を見やれば、目を逸らして地面を見ていた。

「ってことがこの子供が旦那とも言っんですかイ？」

子供はびくびくしていたが、突然走り去ろうと駆け出す。

「おいっ！何逃げてやがる！」

「旦那あー茶色いモン付いてますよ。足に」

10m程先にいた子供は突然立ち止まると、しゃがみこんで足の裏を確認した。

それを見た総悟は口端を吊り上げる。

「確定」

「確定」

見たは良いけれども足は無事で、背後から声が聞こえてハツとする。

「俺アあんたに言った覚えはありませんぜ？『旦那』？」

引かなかった！何で足にアレが付いてるぐらいで立ち止まった俺コノヤロー！！

焦りつつ立ち上がって逃げようとしたが、既に時遅し。3人がすぐ後ろに迫っていた。

もうばれてしまったし、逃げる必要は無いのだが、

捕まればマヨラーとドSに散々馬鹿にされる。絶望的なその時。

「あらあ探したのよ？」

抱きしめられた。もがいて逃げようすると、「今は俺に任せろ少年」とささやかれる。

この声は……！ぱつと見上げると突然出てきた人物は笠をかぶった女、じゃないヅラ子だった。

「ご迷惑かけてすみませんー。この子ったら突然どつか行っちゃって」

男の裏声。物凄く気持ち悪い。真撰組の方もすさまじい顔をしている。

「おいおいだん……」

「これはこれは。お子さんが見つかって良かったです」

声をかけようとした総悟を遮る近藤。

総悟が驚いて近藤を見るが、気づかないフリをして、不自然な親子を行かせてしまった。

「良かったのか？行かしちまって。あれゝ野郎だったろ？」

「野郎ならなんなんだ？まず、こういつご時世ゝいっ親子だっているさ」

「いねーよあんなん！！」

「しつけーよ居なくなれ土方、この世から」

「どんな倒置法！？」

「まあまあ。それより山崎」

「ハイ」

突然声色を変えて近藤が呼ぶと、山崎が上から降りてきた。

「あの話はどうなった」

「それがですね」

山崎がポケットからくしゃくしゃのメモ用紙を取り出す。

「桂一派は相変わらずです。特に大きな動きはありません。

高杉を見かけたという話がいくつかありましたが、明確なものは無しです。

できるかぎり聞いたところ、予想では偵察。または遊びに来ただけでしょう」

「遊びに来る、ねえ。奴ならやりかねねえ」

「それとですね」

山崎は少し声のトーンを抑える。

「宇宙海賊春雨が来ているようです」

「そんなのよくあることだろーが」

「いえ。正確には春雨と袂を別った連中。

名を、秋雨、というそうです」

第三訓 前や上を向いて歩く前に自分の歩いてる所にアレが落ちてないか確認

オリジナルの団体ってのはこの最後の秋雨です。そういうこと。

すこしだけこの小説の時間帯？について。

紅桜篇、吉原炎上篇は終わったあとのお話です。

それと、あの転生郷のお話もちよつと重要です。

とは言えど私自身原作12巻まで、アニメはところどころしか見てないので、

時々ここはこーだろうがっていうようなことが起きるかもしれないです。

そんな時はお手数ですが知らせていただけると嬉しいです^^

感想とかもお待ちしております^^

第四訓 果物ナイフといっても使い道は様々。(前書き)

[illegible]

第四訓 果物ナイフといっても使い道は様々。

「ふう…どうにかなったようだな。本当にあの狗どもはしつこいかならな。」

ところで少年、見た感じ悪さはしていなかったが、なんでまた捕ま
りかけて…」

そこまで言ったところで改めて銀時に焦点をあわせ、啞然とする。

「…銀時？」

「気づいてなかったのかよてめエエエ！！」

いつぞやの仕返しにアップパーカットを食らわせたかったが、生憎身
長が足りない。

桂は今にも飛び掛つてきそうな銀時をしばらく見ていたと思えば、
ひょいと抱き上げる。

「うわっ何しやがるツラ」

「ツラじゃない、ツラ子だ。それにしても懐かしい姿じゃないか銀
時」

「好きでなつたわけじゃねーよ。てか下ろせ」

ぎぎぎ、と頬をつねる銀時を無視して、桂はもふもふと銀時の髪を
なでる。

「お前もこのくらいの時は、まだ黙ってばかりだったのにな」

「うつせエエエ人の黒歴史引つ張り出そうとしてんじゃねえ！てか下ろせ」

耳を引きちぎる勢いで引つ張る子供を無視して、今度を頬をつつきだす、女装した20代男性。

「口を開いたはいいが、性格が…」

「黙れつつてんだよ！！てか…」

こめかみに精確なチョップをくらわす。

「ふぐおっ」

「堕ちろ！！」

一瞬にして昏倒した指名手配犯を放置して、銀時は走り出す。

目的地はあの港。標的はもじゃもじゃである。

5分もしないうちに港に着いた。

少し賑やかな港には、天人も侍も入り乱れ、荷物の運搬やら挨拶やらをしていた。

「どーこ行つたかなあいつは」

ふらふらと歩き回っていると、人の少ない辺りに行き着いた。そい
えば、昼飯食つてねーなあ…。

見つけた土管の上にすんと、腰を下ろすと腕を伸ばして欠伸をする。

そのまましばらくまどろんでいるとどうやら、周りに対する警戒心を忘れてしまっていたらしい。

「おいそこのガキ」

びくつと覚醒すると、周りに5人弱の天人がいた。銀時は人様の荷物の上に座ってしまっていたのか、

と自分の下を確認する。間違はなくただの土管だ。となると相手の目的は己。

みるからに物騒な連中だ。

「おいきてんのか？」

「ひつな、なんですか？」

敢えておびえたフリをしてみせる。

「てめえ銀髪だな。もしかして、てめえの父親も銀髪だったりするのか？」

「どついうことですか？」

「俺達ア銀髪の馬鹿強エ侍つてのを探してるわけ。親父じゃなくてもいいわ。知ってんのか？」

お前らの目の前に居ます。とは言えないので。

「すみません…僕に親は居ないし、そんな人も知らないです…」

しらを切る。

「そうか。まあてめえには罪はねえが、このことを聞かれちゃった以上しょうがねえ」

品の無い笑みを浮かべると、今まで話をしていた1人が果物ナイフを取り出し、銀時に突きつけた。

「消える」

途端記憶がフラッシュバックする。

（こっちに包丁を向けて言い放つ男

『っこの化け物が！死ね！』

それが、それで、そうして…、そうなって……）

突然見開かれた赤い目に天人は一瞬たじろぐ。

次の瞬間、果物ナイフは地に落ち、その持ち主も地面に倒れこんだ。

子供は微動だにしておらず、先程と違っていたのは、木刀を両手で抱え込むように持っていること。

ふと、風が走り、もう1人の天人も倒れる。

今度は子供も移動していて、今倒れた天人の目の前にあたる位置に立っていた。

その横の1人も倒れていく。

残る2人はその状況に唖然としつつ、確実な恐怖を抱いた。

子供の目は先程までと違って、光が入っているのに、どこか不安定だった。

その目が向けられた天人が体を震わす。

「ひイツ化けモンだ！化けモンだっ！！」

その声をきっかけに子供は相手に飛び掛る。

また、別の記憶がよみがえる。

『己を護るのではない己の魂を護るために』

はっとして銀時は我にかえる。

両手に握る木刀は天人の額まで残り数センチ。まさに寸止めである。

恐怖からか、相手は泡を吹いて気絶している。

そして、背後からの気配。鋭いものが空を切る音が耳に届いた。

…？いつまで待っても来ない。

恐る恐る振り向いてみれば、倒れこむ天人がいた。

そしてその後ろにもう1人。あの、鬼兵隊の上層部であろう人物。武市がチョップを構えたまま立っていた。

「おや。少女ではありませんでしたか」

なんともいえない。相手はぶった切ると言った奴の腹心の部下。

そして、向こうは助けた人間が誰なのか気づいてない様子。

逆に言えば、逃げられる、ということ。

「た、助けてくれてありがとう、おじさん」

お礼は言って、さっさと逃げようとする銀時。だが、それもままならなかった。

「痛っ」

いつのまにか左足首をくじいていたようだ。

しゃがみこんで局部をさすっていると、本日何度目かの抱きあげを食らう。

「へっ？」

「怪我する前に助けられなかった私に責任があります。治療して差

し上げましょう」

「えっ！結構ですー！親が待ってるのー！」

「何言ってるんです？あなた親居ないっていったじゃないですか」

「うっ（聞かれてたのかよー！）」

「そういうことです。遠慮しないで寄っていきなさい？

それに…意外に少年ってのもいけるかもしれませんね」

じつと銀時を見る武市の視線が痛い。というか痛々しい。

「ひっ…だからいいって言ってるじゃねーかあああ」

閑散とした港に子供の悲鳴が響いた。

第四訓 果物ナイフといっても使い道は様々。(後書き)

今回はとにかく桂と表記しようかヅラ子と表記しようか迷いました。

それだけ。

くだらないと言わないで！凄く重要なのよ！

明日時限爆弾が飛んでくるかもしれないのだもの我が家に！

ちよっぴりシリアス回でした。これからもこんな調子です。

第五訓 ロリコンとショタコンとペドフェリアとフェミニストの違いが知りたい

こんにちは。

少し更新間が空きました。上須です。

しゃべり方とかなんか時間帯とか、捏造が軽く入ってるかもしれない。

第五訓 ロリコンとショタコンとペドフェリアとフェミニストの違いが知りたい

あれから、銀時は武市に背負われ港沿いの裏道を通っていた。

何度か逃げようかとも思ったが、逃げようとすればむしろ誤解を招く上に、

まず、足をくじいていてさほどの移動はできない。ため、おとなしく背負われていた。

とつぜん前がひらけ、人っ子一人居ない港に大きめの船が泊めてあった。

（これってアイツの船だろうな）

予想はしていたけれども。

そのまま船に連れ込まれ、中につながる扉が開かれた。

「先輩ー遅いじゃないっスか」

扉の向こう側には、居間のような部屋があり、壁の近くにおいてあるソファ―にまた子が座っていた。

「おや、すいませんね」

「反省の心が伺えないっス。…何ですかそのガキ」

あー見つかった。銀時は武市の後ろでできる限り縮こまる。

「いや、足を痛めたのを拾ってきまして」

「そんなのほっときや良いのになにしてるんスかあんたは。

てか、ロリコンからシヨタコンにパワーアップスか」

「どちらでもありません。フェミニストです」

そういえば、この2人にはすっかりとは顔を見られてなかった気がする。

と、安心したのもつかの間。

「今度は何を拾ってきたでござるか」

万斎。こいつには紅桜の時にガン見されてたと思う。と銀時は思ったと思いました。…アレ？作文？

やはり、見覚えがあるのか、記憶をあさっているのか、じとーと見つめられる。

「どうかしたんスか？」

「…白夜叉？」

その一言で部屋で緊張が張り詰める。

「…の隠し子？」

「…あの…親はいないそうですよ」

即座に緊張は崩れ落ちる。

「その…早く家に帰りたいんですけど」

銀時は小さく拳手して呟く。

「ああ忘れてました。救急箱と」

武市は銀時を降ろして、救急箱を持ってくると、

なぜか中から氷水を取り出し、銀時の足に押し当てた。

「そういえば、先程この少年、天人に囲まれてましてね」

湿布を張りながら突然言う武市。何を言い出すんだ、と周りの人間は口を閉じた。

「じゃあ、その怪我は天人に？」

「いえ…それが、幼女かと思って見ていたら」

「ロリコン」

フェミニストです。そうしたらですね」

下りが見えた銀時は武市が何が言いたいのかが分かり、冷や汗を流す。

「この子供、その内の天人3人を目にも留まらぬ速さで倒してしま
ったんですよ。木刀で」

はつと2人が銀時を見る。

視線の先に居る子供は、足元を見つめ、気づかれないように木刀を
握りなおす。

また子がチャカ、と銃を抜いた。

「お前…何モンスか」

ふと、扉の向こう側から声が響く。

「なあに騒いでんだ？」

低い男の声にビクリと銀時は体を震わせ、逃げ出そうとする。

「逃がさないっスよ」

が、また子に襟首をつかまれ、宙ぶらりんになる。

対する銀時は顔を青くして、ばたばたと暴れた。

どうにかまた子の腕から逃れると、ソファーと壁の間にもぐりこん
だ。

「あっ！ガキ！」

扉が開き、足音が床に響く。

「し、晋助様！武市先輩が連れてきた子供がソファの裏に…」

カツカツと、こちらへと足音が響いてきて、いよいよ銀時は心臓発作を起こしそうになる。

ふと、自分の上に影ができた。

「あ？てめー奴と似たような髪してんな」

そして手が伸びてきて、あっという間に襟首を握られ、引きずり出される。

銀時は顔だけでも隠そうと両手で顔をおさえた。

「てめえ…顔見せやがれ」

「ガキイなに晋助様に逆らってんだ」

チャカリ、と音がするが、見せたところであまり変わらないだろう。

なら、見せないで、さっさとどうにか逃げたほうがいい。

と思う矢先、腕をつかまれ強制的に降ろされる。

「…手前エ」

「そのーあーえーとーこんにちは」

顔を見た高杉は一旦停止し、銀時は滝のように汗を流して目を泳がせた。

しばらく沈黙が続いていたが、我を取り戻した高杉の狂気じみた笑いによって破られる。

「ククク…まさか本人様だとは。前、次会う時はぶった切るとかほざいてたのによオ」

「チツうるせーな。不可抗力だ不可抗力」

「そーかい」

突然乱暴になる銀時の口調に高杉除く一同啞然とする。

「そのーその子供は一体？」

「銀時だ」

（本人かよーッ！）

3人の心の声が一致した。

「で、」

銀時はぶら下げられたまま、高杉に向きなおると、目を細めた。

「俺を一体どーするつもりだ？一応敵だけど」

「…何もしねえ」

「へ？」

てつきり殺されるなり何なりされるところだ。思い込んでいた銀時は調子抜けて声を上げる。

「なんだア？殺されるほうが良かったのか？」

「いや、そうじゃないけど。なんで、また」

高杉は銀時の問いに、一瞬黙ったかが、すぐクツリ、と笑って続けた。

「てめえの今の姿は、『あの人』が護ってた姿だ。それを傷つけるこたあできねエよ」

銀時は高杉の見続けているものに気が付いて、なんとなく納得した。

そんな表情に気づいた高杉が意地の悪い顔をする

「まずなア。俺がム力つくのは手前エの中身だ。外見傷つけてどうする」

「痛い！なんか今傷ついた！中身傷ついたよ！痛いよ！」

「フツざまあ」

「何だよこのクツジヨク」

普通に話をする高杉に武市が耳打ちする。

「いいんですか？もしも成長して白夜又ぐらいになつたとしたら」

それに対して、高杉は狂気の笑みを一瞬深めた。

「そうなたとしたら……どうにかしてそいつの牙、研いでやればいい」

ま、多分無理だろうけどな。と高杉は銀時との言い合いに気をもどす。

ふと、

グウウウウウウウ

誰かの腹がなつた。

高杉が音のしたほうに目をやると、銀時が、

「なあ高杉」

完璧に光を失つた目でこっちを見ていた。

「う飯ください」

その後、仕方なしに船内にあつたパンを銀時にやつたとか。

第五訓 ロリコンとショタコンとペドフェリアとフェミニストの違いが知りたい

突然ですが、質問コーナー設置しようと思います。

なんか質問なり質問なり質問なりがございましたら、

感想のほうでご質問ください。

この辺で答えます。多分。というかやり方が良く分からない！

まあ、よろしくお願いします。

第六訓 物を買うときは安心の国産製か、安価の外国製か迷うよね。えっ迷わな

注意！

高杉のキャラがつかめず崩壊に至っています^^

だれか。助けてくれ。

第六訓 物を買うときは安心の国産製か、安価の外国製か迷うよね。えっ迷わな

万事屋にて…。

今はもう日暮れで、窓からオレンジ色をした光が部屋の中に差し込んでいた。

そして、その部屋の中には、

「私がすっかりしてなかったからこんなことに…」

「銀さん帰ってこないなあ…」

メガネとメガネ掛け機と加害者の母親が居た。

雇い主が居なくなったというのに、お芝居をされる従業員も珍しいと思う。

「あんなに探しても見つからなかったし。

ねえ神楽ちゃん。行方不明届けだしたほうがいいかな？」

「あん？別にいい必要ないネ。どうせどこかで遊んでるアル」

加害者の母親をやっていた神楽は、あつという間に演技をやめ、耳をほじりだした。

「まあ、そうだね。銀さんのことだし。適当にやっていけるか」

銀時が聞いていたら、きっと新八はシメられていただろう。神楽は……逆にやり返される。

ピンポン

チャイムが鳴る。

「あ、僕出てくるね」

雑用係の新八は、いつもの癖で当たり前のように接客に行く。

「どちら様ですか？新聞ならお断りですよー」

いつもと同じ台詞を言いながらいつもと同じように扉を開ける。

そこには、普通民家の前に立っていることは無いであろう包帯を片目に巻いた男が、

指名手配されている男が、悠々と煙管をふかしていた。

「えーっと…その」

「一時休戦といこうや」

新八の言葉も待たず、勝手に家に入りこむ。

「ちよっ！ちよっ！と待ってくださいよ！」

高杉を追って居間に戻ると、先程居た14歳の少女は居なかった。

「あら？銀時のお友達？

ごめんねエ今あの子出てっちゃってるから。ほら帰ってくるまで座って待っていて？」

世話焼きの母親、神楽だった。

「あつ…そうなんスカ。すいません」

「お前もノるんじゃないエエエ！」

遊びに来た男子生徒を始める高杉に、怖気づくことも無く鋭いツツコミを入れる。

条件反射という奴だ。

「まアどうでもいいんだよんなこたア」

高杉は腕に抱えている物に掛けていた羽織をどけた。

「銀さん！」「銀ちゃん！？」

抱かれていたのは、半分口をあけて平和的に眠る銀時。

どう持っていたんだとかいうツツコミは無しの方向で。

「お前銀ちゃんに一体何したアルカ？」

眠る銀時に手を伸ばす神楽。

「何もしてねエよ。腹減ったっていうから飯食わせてやったら寝ちまった」

神楽は真顔で銀時の頬をふにふにと突付きながら続ける。

「私が知りたいのはそこじゃないアル。何で銀ちゃんがお前の元につて訊いてんだヨ」

それに対し、高杉は狂気の笑みを深めてクルクルと巻いた銀髪をいじる。

「俺の部下が連れてきた。足を怪我してたんだとよ」

いじられている銀時が眉をひそめるのを見ながら、

「あんたら顔を手が繋がってねーよ」

と軽くツッコミを入れる新八だった。

「で、何か用があるんですよね。銀さん1人でも帰ってこれたはずですし」

あのいじめに耐え切って未だ夢の国の銀時は、ソファーに寝かしている。

「まア、お知らせつていや良いだろうな」

高杉がちらと銀時に目をやったので、新八も見ると、神樂がまた頬を突付いていた。

「神樂ちゃん。銀さんもの凄い嫌がつてるから」

それを無視して、高杉は続ける。

「コイツが縮んだつてのは、菓子でも食ったからだろう?。」

「!そうですよ。坂本さんが送りつけてきた、チョコレートです」

「へエ。辰馬がか」

高杉が、煙管を唇から離し、ポカリと煙を吐いてククツと笑った。

「多分そいつは『おもひでチョコ』やらなんたらいう菓子だ」

「『おもひでチョコ?』」

「あア。今宇宙で人気を博してる天人製の変な製品だ」

「天人製なんですか、あれ。一体どういう物です?。」

「そうそう焦るな」

銀時が戻るのが心配でつい先を知ろうとする新八を、知ってか知らずか、

ゆっくりとまた煙を吐く。

「アレはな、食った次の日に変化する。」

変化1日目は小二程度、つまり7、8歳。丁度今の銀時ぐらいだ。

2日目に中二、13、4歳。3日目で高2、16、7。

4日目に何事も無かったかのように元通りだ。お遊び程度の菓子つてことだ」

「戻るんですか！良かった…」

「だがあと2日は過去の姿のままってことか。面倒くせーなオイ
てか何で全部二年！？」

「あ、銀さん。起きてたんですか」

「いや。このチャイナ娘がな」

いつのまにやら起きて説明を聞いてた銀時が嫌そうな顔をする。

神楽に対してなのか、チョコレートに関してなのかは知らない。または、その両方だろう。

「んなものテメエが変なもん食うのが悪いんだよ。」

それにしても銀時イ。お前懐かしい格好になったな」

二ヨ二ヨと意地悪い笑みで銀時を見る高杉。

「そついや、高杉さんって銀さんと何時からの知り合いなんです？」

「ん。『あの人』が、連れ帰ってきた時からずっと腐れ縁だよ。切れねーかなコレ」

「…？『あの人』？」

色々と曖昧で、気になった新八は何よりも耳にかかった言葉を尋ねる。

それに対して銀時は答えず、高杉は先程とは違う寒気のするような笑みを浮かべた。

その笑みはまるで、言ったところでお前に何が分かるんだ、とでも言いたげな笑みだった。

「ほうほう、そうアルカ。銀ちゃんはこんな片目ヤローとつるんだから」

マダオになってしまったアルネ…」

「何が言いたい。その女^{アマ}ア表に出ろ」

あー悲しやと顔を歪める神楽に、青筋を立てる高杉。

それはあまりにも普段の万事屋の光景と変わらなくて、

新八はこの男が攘夷志士なのだというのを忘れてしまいそうだった

た。

銀時の懐かしい姿に釣られたのか、はたまた本当の彼はこういう男なのか。

一体何がこうも高杉の心を黒く澱ませ、歪めてしまったのか。

「え、何やってんのオメーら！？表出ないの！？」

気づけば、居間は乱闘会場になっていてティッシュ箱やらジャスタウェイやら、

物が飛び交いだしていた。

「ちょっと！新八君！ツツコンでよ！」

「もう止められませんて」

新八は、なぜだか和やかに微笑んでいて

銀時は、新八が役割を投げてしまったのだと頭を抱えた。

ふと、乱闘する高杉と神楽、それを見守る新八が、

喧嘩をする子供の高杉と桂、そして『先生』と重なって、

つい、目をこすった後、銀時もまた、その目つきを優しいものへと変えた。

第六訓 物を買うときは安心の国産製か、安価の外国製か迷うよね。えっ迷わな

もうキャラ崩壊にも程がありますね、

全国の皆様誠に申し訳ございません。

とりあえずパソコンの前で土下座したいと思います。思うだけです。

前にも言いましたが、過去の捏造はいります。

捏造って言うか、こんなじゃないかなーという想像の産物です。

想像と創造は表裏一体なんですよ。というか字が違っただけ。

では、私はテスト週間に入りますので、またいつか。

お知らせ

個人的な都合で誠に申し訳ないのですが、

この小説をUPするよりも前に、ネット上に同じようなネタの作品を書かれている方がいらして、

あまりに内容が被っていてその方に申し訳なく思い、更新を停止させていただきます。

続きを楽しみにされていた方々には本当に申し訳ありません。

いつか該当箇所を修正した時には更新を再開させていただきます。

それではまた、いつの日にか。

ネタが降ってきたら別の小説も作成するつもりです・ ・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9635n/>

虹色チョコレート

2011年10月8日01時09分発行